

28. 律法学者がひとり来て、その議論を聞いていたが、イエスがみごとに答えられたのを知って、イエスに尋ねた。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」
29. イエスは答えられた。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。』
30. 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』
31. 次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令は、ほかにありません。」
32. そこで、この律法学者は、イエスに言った。「先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほかに、主はない。』と言われたのは、まさにそのとおりです。」
33. また『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する。』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。」
34. イエスは、彼が賢い返事をしたのを見て、言われた。「あなたは神の国から遠くない。」それから後は、だれもイエスにあえて尋ねる者がなかった。

説教

8月には平和を考える時です。イエスさまのことばを通して平和を学びましょう。

律法学者のひとりがイエスさまに尋ねます。「すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。」聖書にはたくさんの教えがあるので、そのうちどれが「一番たいせつ」かは、それこそ「大切な関心」となります。イエスさまは答えます。「一番たいせつなのはこれです。『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』」「神を愛する」教えに続いて二番目に大切なのは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」であると言われます。そして、こう付け加えるのです。「この二つより大事な命令は、ほかにありません。」「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」

これを国際平和の原理として真剣に考えた人々がいました。韓国で日本の神社参拝強制に抵抗して殉教した朱基徹牧師です。

1933年12月25日、自分の牧会する韓国馬山の教会で「聖誕節に際し、世界の信者に奮起を促す」と題する説教をします。そこで、この世に争いが絶えず、とりわけ「キリスト教国」と言われる「英国」「米国」「欧米各国」が互いに殺し合っている現状を批判します。その原因は、彼らが、キリスト者として、個人と個人の間では、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」と教える「黄金律をそのまま適用しなければならないと考える」にもかかわらず、国家と国家の間ではそう考えないからだと言います。すなわち、「個人と個人との間に於いて私を犠牲にして相手を生かすべきであるとする」との対し、「国家と国家との間に於いては未だに私のために相手を殺すサタン（悪魔）の法則を適用し」、「自分の国がうまくいくためには相手の国をぼろくそに殺している」と言うのです。それで、こう結論づけます。「イエスの教訓を個人と個人の間にも適用するように、国家と国家の間にも適用しなければなりません。」

アメリカで公民権運動を指導してノーベル平和賞を受賞したキング牧師もまた、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」との聖書の教えを国際社会にまじめに適用しようとしたひとりです。

彼は、聖書とインドのガンジーから学んだ絶対的非暴力主義を実践しながら、黒人の公民権運動を成功させま

した。そして、その教えを国際関係に適用しようとするのです。「“もう一方の頬を向ける”哲学、“汝の敵を愛せよ”という哲学は、ただ個人が他の個人と衝突している場合にだけ妥当なのであって、人種間・国家間の争いにはもっと現実的なアプローチが必要だと、私は考えていた。」しかし、ガンジーの思想とその実践を見てその考えが変わります。「愛の力に対する私の懐疑は次第に小さくなっていった。キリストの愛の教えは、ガンジー的な非暴力の手段を通じて働けば、圧迫されている民衆が自由のために闘う際に、一番強力な武器の一つになるということが初めてわかってきた。」そして、「人類が核兵器による絶滅の脅威にさらされている」現代に於いては、非暴力主義が国際関係にも有効だという考えに至るのです。「最近になって、私は国際関係でも非暴力の手段が必要だということがわかってきた。…私は、近代兵器の潜在的破壊力が、戦争というものから再び消極的な善の働きをする可能性さえ奪ってしまったと信じるようになった。人類には生存の権利があるというのなら、我々は戦争と破壊に代わるものを見つけなければならない。宇宙的運搬手段と誘導ミサイルの現代には、非暴力か死かの選択しかないのだ。…私は、人類が核兵器による絶滅の脅威にさらされている時に、教会が沈黙しているわけにはいかないと確信しているのだ。教会は、その使命に忠実なら、軍備競争の終結を呼びかけねばならない。」

「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」この正反対は、朱基徹牧師の言うように、「私のために相手を殺す」ことです。「自分の国がうまくいくためには相手の国をぼろくそに殺す」ことです。かつての日本のように、自国の「国益」のために相手国を侵略し、その「国益」を略奪することです。これは自分のことしか考えない、神も人も完全に無視した、まさに「サタンの法則」です。そして、戦争がなぜ起こるかと言えば、これもまたかつての日清戦争、日露戦争、満州事変、日中戦争、太平洋戦争、そして最近では湾岸戦争がそうであったように、利権の争奪、「国益」の衝突がそのまま戦争となります。両国が互いに自国の「国益」を主張し、それを武力で実力行使しようとするすると戦争になるのです。そこで、戦争を避けるために人間は様々な方法を考えました。その代表的なものが軍拡による戦争「抑止」です。これは自分が強くなることで相手に戦争を思いとどませるというもので、その最たるものが「核抑止」という考えです。特に、第二次大戦後は、「核」を保有することが国際的に発言力を有することになるので、競って核兵器と原発を開発します。しかし、この結果として、キング牧師の警告するように、人類は「核兵器による絶滅の脅威にさらされている」のです。

こうした極めて危険な時代にあって、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」、この聖書のことばは重要な意味を持ってきます。互いに「力」を競い合う中で、どちらかが冷静に理性を働かせ、力を放棄して、争いを終結させなければなりません。

太平洋戦争は日米の「国益」の衝突でしたが、戦後の日米関係もまた両国の「国益」緊張の歴史です。安倍晋三は、「自分の祖父・岸信介は、日米安保条約の双務性を高めるために 60 年安保改定を行った。それは、祖父の時代のぎりぎりの努力の結果」と高く評価した上でこう述べました。「我々には新たな責任がある。それは、日米安保条約を堂々たる双務性にしていくことだ。」これは、アメリカと「血を流す」ことで対等な「血の同盟」を築き、それによって「双務性」を高めてアメリカに言いたいことが言える関係を目指すということなのですが、ここに日本の対米外交の苦悩の歴史が滲み出ています。

戦後、日本は、安全保障をアメリカに依存しながら、同時に日米の不平等関係の解消、差別的待遇からの脱却と対等性を目指しました。1951年に成立した旧安保条約は、日本には基地を提供する義務があるものの、アメリカには日本を防衛する義務はないという、極めて不平等な駐軍協定としてスタートします。そして、互いに有利な状況にしようと駆け引きがなされます。アメリカとしては、占領期の米軍の特権を維持し続けられるようにしたいし、一方、日本としては、差別的で不平等な占領規定を解消して、アメリカとの対等を目指すことが、悲願となります。具体的には、アメリカは、基地を維持し、その駐留費用を負担させ、さらには日本本土の防衛や国連決議に縛られることなく、独自の判断で軍事行動を行う場合にも、日本の基地を自由に使用する権利（いわ

ゆる「極東条項」)を行使しようとしています。日本としては、米軍の日本防衛義務を明確にし、屈辱的な「占領条項」である「極東条項」を破棄して、米軍基地の使用を日本の防衛と国連決議に基づく軍事行動に限定するよう制限したいところです。1955年、不平等をあらためて米軍の日本防衛義務を明確にする相互防衛条約を交渉した重光葵外相は、ダレス国務大臣から次のように問い詰められます。「現憲法下に於いて相互防衛条約は可能であるか。」「日本は米国を守ることができるか。例えばグワムが攻撃された場合はどうか。」

こうして、半ば植民地状態の日本は、「双務性」を目指すことで発言権を増し、アメリカとの対等を目指します。そして、この「双務性」を目指す努力は、皮肉なことに、結果的には無条件の対米協力となっていきます。1990年の湾岸戦争が勃発すると、在日米軍基地の提供と駐留経費負担だけでは足りないばかりに、総額130億ドルの「戦費」を負担します。北朝鮮の核開発が明らかになると、日本有事でない「周辺事態」に備えて「日米防衛協力のための指針(新ガイドライン)」を見直し、1999年に周辺事態法が成立します。2001年、9.11テロの発生に伴い、「ショウ・ザ・フラッグ」と言われ、アメリカの世界的な対テロ戦争に協力するため「テロ特措法」「イラク特措法」で自衛隊を戦地に派遣しました。そして、「非戦闘地域」に於ける「後方支援」のみならず「戦闘地域」にも派遣して、アメリカと「対等」に「血を流して」戦闘すべく、つい先日2014年7月1日「集団的自衛権」の行使容認が閣議決定されました。安倍晋三は言います。「集団的自衛権を行使できるなら、日米は圧倒的に対等になります。日米が対等になれば、アメリカに対してもっと主張できるようになる。」

こうして、対米追従によりアメリカとの対等を目指した結果が、遂には「集団的自衛権」の行使容認にまで至ったのですが、しかし現実の日米関係は、日本に「主体的判断」を許すような状況にはなく、どんなに日本が軍事貢献しても、「圧倒的に対等」になって発言力を獲得できるなどということは「幻想」に過ぎません。なぜなら、アメリカが「目下の日本」に期待しているのは、あくまで「米国がアジアで必要とするような同盟国」になることなのであって、「米国は『目上のパートナー』として日本をそのコントロール下に置きつつ、その『軍事貢献』を最大限に活用しようとしている」に過ぎないからです。こうして、日本の場合には、アメリカのように、単独で世界最強の武力により世界を制圧するような真似はできませんが、世界で覇権を誇示する超大国アメリカに便乗し追従する形で、今や世界中で血を流そうとしています。

利権と力を放棄する道を真剣に考えなければなりません。「国益」のためには「相手の国をぼろくそに殺す」力の支配をあらためなければなりません。「国益」至上ではなく、たとえ「国益」を損なっても「相手を生かす」道を模索しなければなりません。自分中心、自分絶対の「サタンの法則」を捨てて、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」との神のことばに聞き従うよう、この罪の世に警告し、預言しましょう。